

幼稚園でしてゐること (三)

— 観察いろ／＼ —

倉橋惣三

— 『幼児の教育』第四十巻第八・九号

(一九四〇年) から —

「今年の夏は、とんぼをとつて参りますと、いま迄のやうに、たゞ籠の中へ入れて置きますだけでなく、この羽はこうだとか、この足はこうだとか、いろ／＼くらべては面白がつて居ました」

「比較研究ですか」

「ホ、ホ、ホ、そんな大したことではございませんが、時には随分こまかく注意しまして」「そうですか。それでは一かどのとんぼ学者におなりでしたね」

「とんぼばかりではございません、海へつれて参りました間なんか、貝殻を拾つて来ては、

色だの形だので種類わけをいたしまして」

「貝の名は御承知ですか」

「それがね先生、一々私に聞くのでございますが、お恥しいことに、私も頓と存じませんで」

「沢山ありますからね。それで、どうなさいました」

「太郎も仕方なく、勝手な名をつけてゐました」

「たとへば」

「それがおかしいのでございますよ。紅貝、白貝、まる貝、なが貝、すべ／＼貝、ぎざ／＼貝……」

「ハ、ハ、ハ、愉快、ゆ貝」

「いやな先生、しやれなんかおつしやつて」

「太郎は真面目なんでございます」

「いや、ふざけたんぢやありません。ほんとうに愉快なことなんです。太郎さんは、そういう方ぢやなかつたんですね」

「ほんとに。それで、これはきつと幼稚園で教へて下さったことに相違ないと、皆で申して居ります」

「教へたといふ訳でもありませんがね。それは至極いゝですね」

「一体どういふ風にお導き下さいますのでせう」

「まあ一口にいへば、物に注意させることです。子どもの興味は元来強いものです、それを一層綿密に、といふよりも丹念にといひませうか。それで、いろいろこまかい点にも目がつき、自然、比較といったことも出来て来るのですね」

「とんぼや、貝のお稽古がございますので：……」

「そんな時間なんかありませんよ。貝なんか海岸のやうにありはしませんしね。たゞまあ、同じきしや、ごおはぢきをする時でも、序にそんな指導の機会もありますかね」

「注意の稽古とでも申すのでせうか」

「そんなこともいひませんな。われ／＼の方では観察と申してゐるんですが。勿論お子さん達に、そんなことをいひはしませんですよ。さあ観察始まり／＼なんてね」

「まさか。ホ、ホ、ホ、」

「幼稚園といふところは、子どもの年齢から、空想、想像に属することが多く取扱されるのですが、それに対して、実物を与へるんですね」

「実物と申しまして」

「実際にあるものですね。先づ自然界のいろ／＼」

「私共学校で学習しました博物でございませぬ」

「違ひますよ。あれは知識ですがね、幼稚園では動植物学の知識なんか教へはしません。たゞ、草でも木でも、蟲でも鳥でも、ありのまゝに実地観察をさせるだけなんです」

「喜びませうねえ」

「われ／＼が特に指導しなくても、子どもにはそういう興味があるんですがね、中には、そういう傾向の発達してゐない子ども、ありますから、導いてやる必要がありますね。それに、都会の生活では、そういう自然物に接する機会も少いですから、幼稚園でその機会を作つて上げるんですね。一度そういう傾向が引き出され、ば、子どもは喜びますよ」

「そこで、とんぼ研究、貝研究が始まりますんですね」

「研究といふと学問らしいが、子どもとしては、確に研究ですね」

「もの知りになりませうね」

「またそんなことおつしやつてはいけません。もの知リなんかにするのぢやなくて、もの知らうといふこゝろを養ふといふ訳です。理科知識でもなく、そうした心の働き方が主なんです」

「それで、すべ／＼貝、ぎざ／＼貝でもよろしいんですね」

「よろしいといふ訳でもありませんが、貝の名称だけ覚えても、すべ／＼、ぎざ／＼を自分で触つたことのないのより、よろしいですね」

「観察と申すのは、自然界ばかりで」

「いゝえ。家の中の道具でも、自動車でも、電車でも、汽車でも」

「いよ／＼博學」

「またいけません。学じやない。知つてるところがえらいのぢやなくて、自分で実物を、よく注意すること、し得ることが望ましいのですよ。つまり、知識そのものを沢山与へられて持つてゐるといふのでなく、自ら実物から知識をつくり出してゆく心の第一の働きを強くするのですよ」

「そこが、幼稚園の有り難いところでございますね」

「有り難いかどうか、そこが幼児教育の一つの役目ですね」

「私ども、小さい時そういふ教育を受けませんでしたから、知識は教へられて覚えること、ばかり思ひまして」

「教へられたゞけのことだから、さつさと忘れて。いやこれは失礼。ハ、ハ、ハ」

「ホ、ハ、ハ、ハ」

\*旧漢字を新漢字に直した以外は原文のまま掲載しています。

## 母の書棚

観察に就てのお話が出た關係から、その参考にする本をと、思ひついた二つ。最も古いのと、最も新しいのと。

### ○ファール昆虫記

林 建夫 譯  
山田 吉彦 譯  
岩波文庫 各冊金四拾錢

これは、どなたも御承知の有名な古典ですが、その割に讀まれてゐなかつたりします。兎に角、子どもの自然觀察指導には、おとながよく勉強して置く必要のある本です、これをこのまゝ讀ませるのは少し大きい子のことですが、幼児の母にとつて、先づ第一の指導書です。

○觀察の實際 東京女子高等師範學校  
附屬幼稚園編

日本幼稚園協會 金一圓

ファールと並べるのは、沙汰の限りでもありますが、幼稚園児に何をどう觀察させるかの實際的指導書で、幼稚園の先生方に廣く讀まれてゐます。お母さん方も、心ある方はどうぞ。

▲『幼児の教育』第40巻第8・9号(1940年)p.63の誌面から